

顕微鏡で見る血液
は新鮮心（医学検査学科）



おっかなびっくり、赤ちゃん抱っこ
（看護学科）

魅力に触れた！千人近い来学者



自助具うまく使えるかな（作業療法専攻）



狙ったことばを釣り上げる！（言語聴覚専攻）



超音波で腕を見る（理学療法専攻）

学内ツアー、先導はピアサポーター



令和7（2025）年度の第1回オープンキャンパスが20日（日）に実施され、荒天で時間短縮となった昨年7月期の同イベントを300人以上上回る993人の高校生や家族らが本学の魅力に触れました。

学科ごとに開かれた全体説明では、各会場、席が足りず立ち見がでる盛況ぶり。引き続き、来学者たちは目指す学科・専攻の模擬実習、進学や奨学金・アパートなどの相談など、お目当てのコーナーへと足を運んでいました。

模擬実習では、各学科・専攻が工夫を凝らした内容が盛りだくさん用意されました。高校生たちは、実際に実習器具を使った検査や測定などを体験。ゲーム形式の実習も目白押しで、訪れた高校生たちは興味深そうに取り組んでいました。

同日は、ピア・サポーターや協力学生たちも大活躍。学内ツアーの先導、恒例の「先輩と話してみよう」コーナーでの相談者、模擬実習のサポーター役などを務め、高校生からは「優しくて親しみやすい先輩ばかりで安心した」などの感想が聞かれました。

本年度初めて設けられたアカデミックスキル支援センターのコーナー（キャンパステラス）では、同センターの上級指導員2人（3年次生）がセンターの仕組みや内容を自身の経験を交えながら披露。約30分にわたる2人の絶妙な掛け合いに刺激を受けた生徒が、終了後「この大学に決めました」と駆け寄る場面もありました。

本学のオープンキャンパスは、8月24日（日）にも開かれます。（NL編集部）

2025年度 第1回オープンキャンパス

絶妙な掛け合いで高校生を引き付けたアカデミックスキル支援センターの上級指導員





言語聴覚学専攻「聴覚補償学」

円滑な日常生活へ 支援機器の理解深める

言語聴覚学専攻の講義「聴覚補償学」（担当：佐藤公美助教）では、1・2年次に聴覚障害に関する知識を身につけた3年次生が、日常生活を不自由なく送るために聴覚を支援する機器について学びます。

7月3日（木）に3219実習室で行われた講義では、医用検査機器等販売の九州リオン株式会社の竹松知紀氏を講師に招き、「補聴器」について学びました。講義中、外耳道を細い専用のライトで照らして慎重に確認したり、補聴器を耳に装着する際に重要となるイヤホンと機械をつなぐチューブを耳の形や大

きさに合わせてカットしてお互い装着し合ったりと実践も多く、学生たちは真剣に取り組んでいました。

補聴器を耳に固定させる「イヤモールド」と呼ばれる耳栓を作るための耳型の採取体験の際には、専用のシリコンをよく混ぜて、固まる前に紙に描かれた形に絞り出す実践も。なかなかうまくいかずに苦戦する様子も見られましたが、試行錯誤の末、上手にできたときは「見て見て～」とお互いに見せ合うなど、前のめりの姿勢で学んでいました。

（NL編集部）

言語聴覚学専攻「言語聴覚療法マネジメント」

施設運営に必要な知識...企画書も作成

言語聴覚学専攻の「言語聴覚療法マネジメント」では、言語聴覚士を新しく雇うにはどのような設備が必要となり、雇用コストはどのくらいかかるのかなど、施設の運営に必要な知識を学びます。これまで、学生たちは授業担当の池寄寛人准教授から、診療で得られる金額の計算や診療する部屋の広さについてなど、運営する上で重要になる点を学んできました。さらに、「既存の病院に新しく言語聴覚士を雇ってもらう」という想定で、診療場所の広さ、雇用人数や室内のレイアウトなどを入れ込んだ、詳しい企画書を作成しました。

1日（火）は、3213、3217実習室で企画書内容を発表しました。グループ全員がバラバラになって、別々のグループの2人の前でプレゼンテーション。普段は仲のいい学生たちですが、発表の時は自然と敬語を使い、説明を聞いた学生たちも気づいた点や疑問点をぶつけていました。

最後は元のグループに戻り、指摘された点やアドバイスをどう生かすか相談。実際に施設を

立ち上げる場合は、見込める収益とともに、人件費や設備投資など、出ていくお金のこととも理解しておかなくてははいけません。またその理解が、今後学生たちが働いていく上で、自分たちや身の回りのものに大きなお金がかかっていると自覚することにもつながります。言語聴覚士としてだけでなく、社会に出るうえでも大切なことを学べる授業の一つです。（NL編集部）



発表後の意見交換を見守る池寄准教授

日台大学学長フォーラム 竹屋学長が登壇

日本と台湾の大学や高等教育関係者の交流推進や地域産業界との連携などを議論する「2025 日台大学学長フォーラム」が16日（水）、熊本市のホテル日航熊本であり、竹屋元裕学長がパネラーの一人として登壇しました。

国公立大学団体国際交流担当委員長協議会が主催し、台湾高等教育国際合作基金会の共催のもと熊本大学が開催校となって開催されました。日本から48大学、台湾から31大学・組織の学長を中心とする150人近い高等教育関係者が参加。本学からは竹屋学長と川口辰哉副学長が出席しました。

フォーラムでは、「日台間の学生・若手研究者の交流」「地域発展に向けた産学連携」「自然災害における大学の役割」「高等教育におけるDX」の4つのテーマについて活発な議論が展開されました。竹屋学長は「高等教育におけるDX」について、4人のパネリストの1人として登壇、保健医療系大学にお

けるDXの現状と課題について発表し、参加者の関心を集めていました。



「高等教育におけるDX」をテーマに意見を交わしたパネルディスカッション。壇上右から3人目が竹屋学長

閑話休題 高橋 元秀

遠い宇宙と身近な微生物

上熊本の高層階からは、熊本城、阿蘇火山群、金峰山の稜線が見渡せる。深夜の大気条件が良好な夜間には、オリオン座、北斗七星を含む満天の星雲が降り注ぐ。宇宙には宇宙には約 10^{23} 個の恒星が存在すると言われている。一方、地球上の微生物総数は 10^{30} 個を超え、これは星の数の約1千万倍に相当する。

微生物はヒトの常在細菌叢を含む多様な生態系に分布しているが、その多くは培養できずにいる。同定できている微生物はごく一部にすぎず、それらはすべて、人工培地で単離・培養可能なものに限定されている。腸内や自然環境中では、複数種の微生物が複雑な相互作用を通じて集落を形成しており、その組成や機能の解明には単離依存のアプローチでは限界がある。

近年、微生物や生体内の働きの解析に、DNAやRNAなどの遺伝情報だけでなく、たんぱ

く質や代謝物の複数情報を統合して分析する技術が発展している。多方面からの総合的な解析により不明であった生命現象の全体像が明らかになるようとしている。腸内環境、土壌微生物叢、海洋堆積物など、多様な微生物群の構造的・機能的特性を解析可能にする科学分野が脚光を浴び始めた。

宇宙物理学と微生物生態学の双方における他分野知見の融合・統合は、物質循環、生命の進化、地球外生命探査といった学際的課題へと進展することが期待される。掌の土一握りに銀河を超える生命が潜む事実は、現実的過ぎて比喩の対象外になった。星降る夜空を見やり、遠く手の届かない宇宙にロマンを重ねる。我々は地球上の身近な微生物と、神秘的な宇宙の不思議とを結ぶ「科学の糸」を結ぶことになる。As above, so below.

（生物毒素・抗毒素共同研究講座特命教授）

銀杏アラカルト

■九学、ルーテル高生徒が来学 九州学院高校の生徒33人とルーテル学院高校の生徒59人が22日（火）、本学を訪れ、学内施設を見学しました。一行は入試・広報課職員から本学の概要や医療職についての説明を受けた後、アリーナ

や図書館など、学内の各施設を見学。各高校を卒業した在学生から大学生活に関する体験談などを聞いた後、本学のレストランで昼食を食べ、味覚でも本学の魅力を味わっていました。

（入試・広報課）



職員の話聴くルーテル学院高の生徒たち

写真左は、舞台上で熱演する学生たち。同右は、本番を控えキャンパステラスで大道具づくりや発表練習に励む学生たち



アカデミックスキル
支援センター

レポート

全学1年次生「アカデミックスキルⅠ」

生き生きとオリジナル寸劇披露

アカデミックスキル支援センターによる全学必修科目「アカデミックスキルⅠ」（1年次生、3クラス）の「発表会」が、3日（木）～15日（火）にかけ、クラス（学科）ごとに50周年記念館で行われました。学生たちは「からだの不思議を小学生にも分かるように説明しよう」というテーマの下、班ごとに工夫を凝らした寸劇などを披露しました。

アカデミックスキルⅠは、2年次前期まで続く「アカデミックスキル」科目の基礎編。学生たちは「伝えること」「学ぶこと」の意義をメールマナー講座や基調講義などを通じて学んだ後、最終テーマの「からだの不思議」に挑みました。

学生たちは、班ごとにテーマを決め、シナリオや絵コンテを作成。ほとんどの班が発表手段に寸劇を選んだこともあり、発表前2～3週間は、大道具や小道具を作成する傍らで発表練習をする姿が、学内のあちこちで見られました。

50周年記念館であった発表会では、各班が5分間の持ち時間の中で熱演。コミカルなセリフや演技に笑いが巻き起こるなど、終始、会場は活気に満ちていました。

なお、優秀だった数班は8月9日（土）に開催される「からだのふしぎ探検in熊本保健科学大」で、小中学生を前に上演します。

（NL編集部）

女子ハンド「ピンディーズ」フィールドテスト

競技力向上へ3年目は9項目の測定

健康・スポーツ
教育研究センター

レポート

女子ハンドボールチーム「熊本ビューストピンディーズ」の選手を対象にしたフィールドテストを7月12日（土）、山鹿市のオムロン鹿陽センターにて行いました。本取り組みは傷害予防や競技パフォーマンス向上を目的として2023年度から開始され、今年度で3年目を迎えます。

今回は16人の選手を対象に、本学教員の指導の下、理学療法学専攻スポーツリハビリテーションコースの2～4年次生11人と大学院生4人が測定にあたりました。測定項目は事前に本学教員とチームトレーナーの話し合いによって決定され、ハンドボールと関連が深い9項目に絞りました。3年目ということもあり、選手も測定の流れを把握し、昨年のデータと今回のデータを比較したり、超えるべき目標値を設定したりして、測定に臨んでいました。

チームスタッフも選手が測定に集中しやすい雰囲気づくりをしてくれ、これまで以上に活気あふれる測定会になりました。

（健康・スポーツ教育研究センター 中村祐貴）



三段跳びの測定をするスポーツリハビリテーションコースの学生（青の着衣）

自転車による事故が後を絶ちません。このため、ヘルメットの着用が努力義務化されています。「ヘルメットをしていて助かった」。そんな声が、本学の学生から届けられました。自転車走行中のヒヤリハット体験を報告してもらいました。



ヘルメット着け大事に至らず

自転車走行中に転倒

私は大学2年生の頃から自転車を利用して大学への通学を始めました。大学ではヘルメット着用を推奨しており、大学の入り口では学生の登校時間に合わせて、先生方が見守る姿もよく見かけます。しかし、実際には自転車に乗る人のヘルメットの着用率はまだ高いとは言えません。

先日、自転車でスピードを出して走行中、車道と歩道を隔てる段差にタイヤを取られ横転してしまいました。腕や膝を強く打ち、擦りむいてしまいましたが、ヘルメットを着用していたことで頭部を強打することはなく、大事には至りませんでした。大学の保健室で手当を受け、今では無事に回復しています。

あのときヘルメットを着けていなければ、頭を打ってもっと深刻な事態になっていたかもしれません。ヘルメットに付いた傷を見れば、大きなけがになっていた可能性もあります。日頃から安全運転やヘルメットの着用を意識することの重要性を強く感じた出来事でした。

道路交通法が改正され、来年度からは反則金制度の導入など、自転車に対する取り締まりも強化されるそうです。事故は誰にでも起こり得ます。自分の安心と安全のためにも、ぜひヘルメットを着用することをおすすめします。

(医学検査学科3年 清田友将)

転倒時、ヘルメットに付いた傷。全のため、ぜひ着用して」と筆者「安



酒、たばこ...きっぱり断って！

公衆衛生看護学専攻科生
北部中で薬物乱用防止教室

公衆衛生看護学専攻科生20人が15日（火）、熊本市北区の北部中学校で薬物乱用防止教室を実施しました。学年ごとに「飲酒」「喫煙」「薬物」の内容に分かれ、これらの物質が体にどのような影響を与えるのか、また誘われた時にどう断るかといったことを、実演を交えて伝えました。

同専攻科の学外演習の一環。専攻科生たちは中学校からの要望や、生徒への事前アンケートなどを踏まえて、発表内容を検討してきました。

この日は、違法薬物や20歳未満の飲酒や喫煙の恐ろしさを訴えるだけでなく、「自分の体は世界にたった一つの大切なもの」「ぐんぐん成長している大切な時期だからこそ気をつけてほしい」など、随所に生徒の立場に立った言葉を投げかけていました。また、生徒たちに誘われた時の断り方を実際に演じてもらうロールプレイングを取り入れるなど、興味をもって参加してもらう工夫も見られました。

それぞれ発表の後には、生徒からの質問時間も設定。「お酒を使ったお菓子は食べてもいいですか」との質問には、「法律上、お酒類にはあてはまらないが、発達途上であるみなさんの脳にも影響があるので、避けた方がいい」と答えていました。（NL編集部）



先輩に誘われた時のシミュレーションに参加する北部中の生徒（左）。しっかり断り、大きな拍手が送られた

インフォメーション

週間行事予定（7月28日～8月4日）

7/29（火）	【学術研究会議】研修会・説明会
7/31（木）～	前期定期試験